



## ●●●●●●●●●● S-KYT研修を実施して ●●●●●●●●●●

高知縣市町村総合事務組合（黒潮町）

### 1 はじめに

坂本龍馬や四万十川で有名な高知県。県都高知市から南西方面へ約100km先、四万十川下流域のちょっと手前に黒潮町があります。黒潮町は、平成18年3月20日に大方町と佐賀町の合併により誕生、「人が元気、自然が元気、地域が元気」を合い言葉に、2町の速やかな一体化を促進して4年目を迎えています。

この黒潮町は、Tシャツアート展をはじめとする砂浜美術館やカツオの一本釣り、ホエールウォッチング、サーフィンなど、「海」の観光地で有名ですが、実は町の面積約188平方キロメートル中78%が林野面積という、いわゆる中山間地域。類にたがわず少子・高齢化の進む町です。

### 2 黒潮町消防団の沿革

黒潮町消防団は、2町の合併と同時に、大方町消防団（定数200人）と佐賀町消防団（定数90人）が組織統合を図り、定数290人の組織として発足しました。

合併当初は、旧2町で5方面隊という組織形態でしたが、迅速な一体化を目指し、合併1年目でその組織の見直しを行い、定数290人を維持したまま、3方面隊に改変しました。

なお、充足率は95%前後で若干右肩下がり傾向にはあるものの、年間20名程度入れ替わる団

員の後継者もなんとか確保でき、平均年齢37.9歳と若い団員が多いという状況です。

消防事務は、四万十市（旧中村市、旧西土佐村）との一部事務組合なのですが、黒潮町（旧2町）は以前から消防団事務だけは消防組合から委託されているという、同じ組合の中でも少し変わった形態をとっています。

これは当時の団長たちの「消防団と行政組織との日ごろの連携を重んじた」結果であろうと察することができます。

風水害時の対応等、日ごろの「顔が見える関係」が奏功する面は多々あり、当町のような中山間地域には「都合のいい」事務形態ではないかと感じるところです。

### 3 S-KYT実践の経過

この「都合のいい」関係にもデメリットはあ



10班に分かれての研修状況

ります。担当者の異動により、消防団との関係性や現場経験が事務局に蓄積されにくいことです。

さらに、平均年齢が若いということは、分団長をはじめ幹部の交代サイクルが早い（2～3年）という側面を持っており、組織の代謝がよい反面、現場の指揮系統にも経験が蓄積されにくいという課題があります。

近年、大きな火災や目に見えた自然災害が少なくなり、「現場」の減少と共に公務災害はほとんど影を潜めています。こうした状況ではあるのですが、先にふれた組織全体が抱える課題や、平成16年度に公務災害による死者を出してしまったという苦い経験から、団員の安全確保について、何か変えなければならないという思いを事務局としては抱えていました。

こうした状況下で、高知県市町村総合事務組合から公務災害実務者研修の場で「ぜひやってみないか」という声掛けを機に、団幹部を口説き、本年度の実施に至りました。



チームでタッチアンドコール！

#### 4 研修の効果

定期訓練のメニューが少々マンネリ化していることや、改めて研修日程を設定すると団員の負担につながることを考慮し、毎年6月に実施している夏季訓練の場で、班長以上を対象に70名体制でS-KYTを実践しました。

はじめのうちは慣れない研修スタイルに少々抵抗を感じていた様子の参加者も、講師のアイスブレイクにより、次第に場に慣れていきました。

全分団をシャッフルした班分けにしたことで、「普段はない他の分団の方と交流できてよかった」「自分が思い浮かばないような事例もあったので、とても参考になった」などの感想が生まれ、団員が交流しつつ現場経験を共有できるという付加価値を生むことができました。

職域でのKYT経験者も複数いて、「職場のKYTと違った内容で参考になった」「消防団でのKYTの必要性に疑問があったが、ケガが減少する可能性は高いと思う」という声もありました。

さらに、「次回も導入を求めます」「できれば継続して行うことが必要では」「分団に帰って



討議内容の発表



最後はみんなで輪になって指差し唱和！

から、他の分団員にも周知させていこうと思う」  
「全員が参加できる研修であればいい」という  
ように、継続及び拡充を求める声もあり、企画  
した事務局にとってはうれしい宿題をいただく  
という成果をあげることができました。

また、研修が進むなかで、現場経験を土台と  
し、「消防」という共通言語で安全管理につい  
て熱心に議論する様子は、現場経験の少ない団員  
にはとても参考になったと思われまし、事務局  
としても、本当にたくましく尊敬のできる姿  
を見ることができました。

## 5 公務災害ゼロに向けて

消防団で活動している方たちは、自分の仕事  
を持った上、各地域のいわゆる要職を担ってい

の方が多く、多忙な日常を過ごしています。災  
害現場に遭遇した際、本人の損害はもとより、  
家庭や地域の「重要な人材」にケガをさせたり、  
ましては命を失うようなことがあってはなりま  
せん。

S-KYTを実践するなかで、「消防を職業とし  
ない消防団員」が安全に活動できるということ  
が、地域の安心と安全を生む前提条件である  
ということを団員と事務局が共通認識とし、消防  
業務に共に当たる関係を今後も作っていく必要  
性を確認することができました。そして、健康  
管理も含めた安全管理意識があいさつをするよ  
うに当たり前のことになる仕組みを根付かせた  
いと強く感じる研修となりました。